

東京電力福島第一原発事故から6年 3.19大阪シンポジウム「講演と語りの会」 教訓を学び、放射線被ばくに備えよう

行動隊員 福永吉延

3月19日(日)、5年半ぶりに大阪のうめだ総合生涯学習センターで、45名の参加者のもと、標記の会が開かれた。

前回の2011年9月11日(日)大阪大学での集会は、在りし日の山田恭暉初代理事長も出席しての、公開講座「東日本大震災と原発事故～いま、関西からできること」であった。特に、関西に居住する行動隊員及び賛助会員は、その後、国内各地で災害支援活動に携わりながら、原発行動隊のあり方を問いつけてきたことだろう。

そんな中、会場準備中から来られた方もあり、会を通じて、参加者全体に強い思いが感じられた。また、質問も多方面からたくさん寄せられ、有意義な会となったが、「講演と語り」の時間が足りないという指摘がかなりあった。

総司会・山田真帆さんの開会宣言があり、進行・管理の安藤博理事長のもと、先ず初めに、伊藤邦夫前理事長が、以下の3点を中心に話した。



氏の話については、わが行動隊理事なので簡略化した。

- ・福島原発行動隊とは何者か—行動隊の目的(技術者による原発事故の早期収束)
- ・集会の位置づけ—特に若い人への教育

・原発事故とは一原子力緊急事態、放射線に関する重要単位



次に、元日本原子力発電株式会社理事、日本原子力産業協会参事の北村俊郎氏は、「原発事故の避難体験から」と題し、原発の過酷事故に備えて、自治体として、電力会社として、住民として何が問題で、何が必要なのか、話された。

「幸いにも」が多かった福島の事故は、防災無線が機能したことや避難方面の道路が寸断されなかったこと、また、「覚悟が必要」なことでは、一定の弱者や旅行者がいること、どんな計画もシナリオ通りにはいかない・最悪シナリオも可能性があること、などが話された。

なお、氏自身が現在富岡町を離れ避難先で暮らしている状況であることも語られた。

元福島県川内村総務課長で現在は環境省福島環境再生事務所課長補佐の井出寿一氏からは、原発爆発後から郡山市への避難まで以下のように語られた。



県民は、原発事故により今なお10万人の方々 が県内外に避難しており、中山間地域のある川





内村は福島原発から30キロ圏内の双葉郡の8か町村に属する。双葉郡は、首都圏に電源を供給する10基の原発や火力発電所が存在し、典型的な電力依存地域になっていたこと。

3月12日の約1万人が富岡町から川内村に避難してこられた。TV映像で原発建屋が次々と爆発している様子を見、命すら危ぶまれる状況の日々で、国や県からの情報が入らず、死が脳裏をよぎり、恐怖と不安で一杯だったこと。

3月15日は川内村が屋内退避となり、16日には大混乱の中、富岡町民とともに60km離れた郡山市への移動を余儀なくされ、事故の重大さと今後の生活などへの不安を抱えながら故郷を後にされたこと。

幸いにも、川内村は放射線量が低かったことから、事故後約半年を経過した9月30日、「緊急避難準備区域」が解除され、遠藤雄幸村長の指示のもと、帰還に向けた準備や懇談会開催が進められた。その後、平成24年4月から役場や小中学校、診療所など、すべての行政機能を再開できた。氏は、復興課長として「災害に強い村づくり」の旗印のもと、さらに全力で突っ走ることになる。

現在は、福島環境再生事務所職員として、見えない物質・放射線の不安を抱える人々に先頭に立ち、故郷再生への希望を胸に日々努力されておられる。たくさんの人々に感謝しながら・・・。



放射性物質の拡散については、大阪大学核物理研究センター協同研究員の藤原守氏より語られた。氏は3.11後、研究者による放射線土壌汚染調査を提案し、文科省環境モニタリング事業である「福一周辺の放射線量等分布マップ作成」プロジェクトチームをリードした一人だ。

放射線被ばくに関する図表を用いて、地球に及ぼす放射線、中でも、ラドン・トロン(0.4mSv)が、医療被ばくを除いては被ばくの大部分であることを述べられた。

また、人に及ぼすリスク、それに対応するマネージメントはあるが、原子力に対しては基本的に(絶対)安全なものはなく、国家としてはフランスIRSNのような機関を設けるとともに、若者への基礎放射線教育が大事であることが述べられた。

原発事故時の避難計画の検証については、化学プラント会社に勤務し、長い間、設計や安全性評価に従事されてきた環境経済研究所代表の上岡直見氏が、現在の避難計画は

「焼夷弾に防空頭巾」と例えながら語られた。

事故後直後、周辺自治体では①現在の正確な状況、②今後の見通しを当然知りたいだろう。しかし、現場では事態収束に奔走している中でそのような余裕がないことを、東電テレビ会議の様子を紹介しながら語られた。



東電本店側の住民避難を意識した発話と、福一現場で自分たちの命の危険を感じている吉田所長との間に意思疎通ができていないことがはっきりと感じられる。緊迫した状況、炎や煙の中では把握できないことがよくわかる。

氏の話から、避難区域が30kmになったことの根拠がはっきりしないことや、屋内退避「立てこもり方針」への転換が、そのための試算前提自体が変遷したことによるとわかった。

休憩後の質疑時間は、比較的長い時間がとられ良かったとアンケートにもあったが、様々な質問が寄せられた。以下、順不同にいくつか記載する。

- ・来年もこの会合はあるのか。
- ・ベクレル、グレイ、シーベルトをわかりやすく説明してほしい
- ・帰村を進めるのはただしいのか。若い人には特にどうなのか。
- ・屋内退避は可能か、屋内退避ですむのか。
- ・若い人の原子力教育が必要というが、フランスの実態はどうなのか。また、それだけでよいのか。
- ・原発事故に対し、国や東電はどういう責任をとるべきなのか。
- ・物理化学面での話だけではなく、産業と雇用の創出、現地起業が大切なのではないのか。

時間の都合もあったが、活発な質疑応答だったこともあり、今回の「講演と語り」をネット公開してほしいというアンケートもあった。

最後に、安藤理事長より、お集まりいただいたことへの謝意と、原発事故の収束のむけてたくさんの困難があるが、行動隊として今後の取り組みを続けて行くことの決意が述べられ、閉会となった。

なお、その後の懇親会には13名の方が参加され、有意義な意見交換がされた。そして、本記録の最後に、閉会后直ちに行動隊に加盟した方がおられたことも報告しておきたい。



大阪集会に寄せて

行動隊 多次貞二

久しぶりの集会参加で多方面の方々のお話、興味深く聴かせていただきました。

私には難しい科学の話はわかりませんが、原子力発電所にせよ原水爆にせよ、本来世の中に存在しなかったものを、欲得のために、敢えて人類が創り出したものです・・・。

宇宙空間から降り注ぐ放射線、地球上の自然界から放出される放射線をあびることは、致し方のないことと思います。

また、医療のため最低限の放射線を浴びることも仕方ないことでしょう。

しかしながら、福島原発事故のときに東京電力の責任者はなんと発言されましたか？

「想定外だった！」？ 想定外なら責任を免れることができると考えているのでしょうか？

考え得る汎ゆる事態を想定して、安全対策を講じるのが運転管理の基本であると思います。

これからも世界中のいろいろなところで原子力発電所は建設され続けるでしょう。また事故も起こります。

地震、津波、全電力喪失、そして原子力発電所事故……日本は世界で初めての原爆被爆国です。

そして、また世界で初めての自然災害による原子力発電所事故による被爆を経験した国でもあります。

これらの、かけがえのない経験と知識と技術を活かして、世界に貢献していくのが日本という国に課せられた責務であると思います。

原子力発電所の設計、製作、運転管理あるいは、これからの始まる廃炉の作業、放射能廃棄物の処理を安全にこなして行かなければいけない。

原子力発電所は徐々に減らして行くべきでしょう。特に火山地帯の上に乗っかっている日本はそうすべきです。

100年、200、300年の長い道のりになることと思います。設計、製作、運転管理、廃炉技術、放射能廃棄物の処理技術、すべてが必要です。

感情的に反原発を唱えるだけでは不十分です。

以上、SVCF大阪集会によせて、ひとこと感想を述べます。

世論の二分化

北村俊郎

イギリスのEU離脱に関する国民投票、アメリカ大統領選挙など国論が二分する現象が世界各地で起きている。アメリカでは移民に仕事を奪われ経済的に困窮した人々が、従来の移民受け入れ政策に批判を強め国論が割れた。ヨーロッパにおいては中東の混乱により移民が地中海を渡ってヨーロッパに殺到し社会不安をもたらした。二分化の元は極端な経済格差や社会的混乱に求められる。

以前はどの国も中間的な集団が大きく占めていて極端な意見は支持されにくかった。しかし、経済的格差の異常な広がりやテロや原発事故のような大惨事あるいはほとんどない不祥事があればそれをきっかけに敵対する二つの集団は、意見を

持たない集団を自陣に取り込もうとし始める。また、特に意見を持たない人も選挙・投票や事故報道に接すれば、問題について期限を切って自分の意見を決めなければならなくなる。

二分化は敵対する集団の双方が感情的に煽ることで決定になる。人々はグローバリゼーションによる倒産や失職に不満と不安を抱き、これによって得をしているものは誰かということを追及し始める。敵対する集団は双方とも自分たちの考えたことが最も素晴らしいという自惚れもあり、物事を客観的に見られなくなり、相手方との議論は無駄と思うようになる。情報格差をなくすどころかドナルド・トランプ氏のようにSNSで真実でないことも含め一方的に言いたいことを流し続ける。

日本では原発を推進するか否かについて国民の意見が二分しており、今は脱原発の意見が多くなっている。従来、日本における原発政策の二分化は社会的混乱や経済格差ではなくイデオロギーと情報格差によるものだった。しかし、福島第一原発の事故が起きて実際に大量の避難者が出てコミュニティが破壊された結果、原発事故を起した責任をうやむやにしようとする為政者や電力会社の姿勢などに疑問を抱き、否定的な意見が多くなっている。

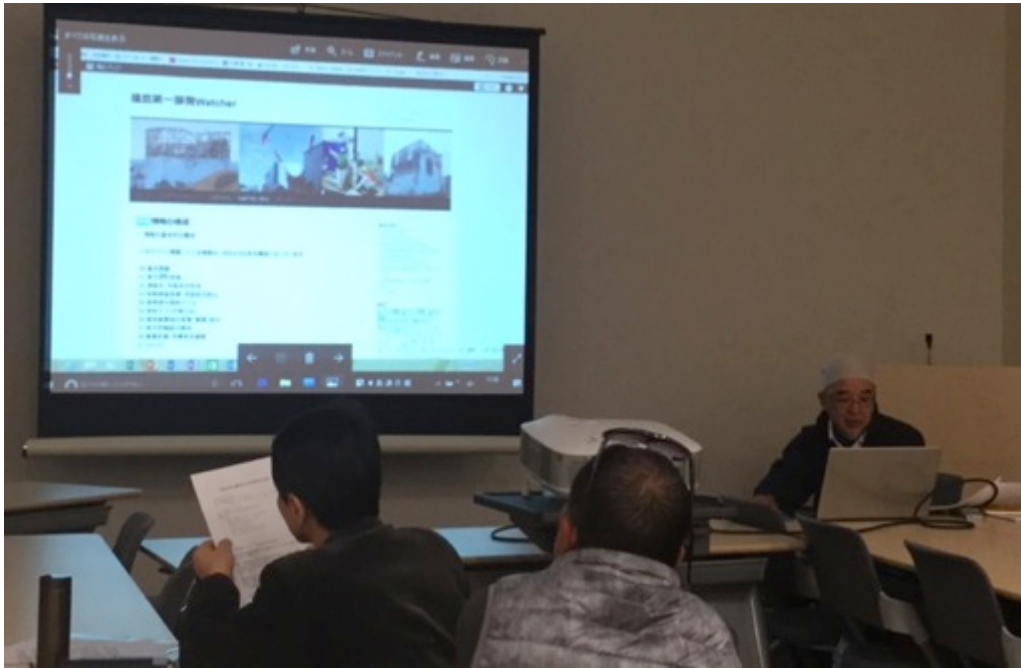
一方、資源小国におけるエネルギー安全保障や温暖化対策としての原発の必要性といったことはいまだ実感を持って理解されてはいない。もし、天然ガスの輸入が止まり大停電で社会不安が起きれば、その実感から原発推進の世論が再び大きくなるだろうが…。

経済問題では貧富の格差によって薄くなった中間層を再び厚くする必要が語られている。原発問題についても情報格差を克服し、事実に基づく判断をする人々を増やす努力をしなければ感情的な対立に発展して道を誤るおそれがある。「原発が全部止まっても停電しなかったではないか」ではなく、今こそ、現実にエネルギー供給に破綻を来さないようにしながら冷静な議論をし、将来の理想的なエネルギー供給体制の確立に向けて緻密な計画を作らねばならない。

先日、「福島原発行動隊」という公益社団法人が大阪で集会を開いたが、主催者は「この集会では原発賛成、反対ではなく、万一原発事故が起きた場合にどのようにして被ばくを少なくしたらよいかについて議論することにする」と発言された。結論ありきで議論するのではなく、より客観的で正確な事実を知ろうとするこうした姿勢こそが、感情的に世の中を分断されないようにするために一番大切なことである。



“官製報告”を通訳する < 1F-watcher >



行動隊(社員) 篠原浩一郎

てきた「原発ウォッチャー」が、2015年3月で休止。その仕事の重要性をよく知る「原発ウォッチャー」メンバーの一部が、福島原発行動隊とは切り離れた形で2015年4月「福島第一原発 Watcher (1F-Watcher)」とし1fwatcher.wordpress.comサイトをオープンした。

2. 通訳

原発廃炉情報を風化させてはならない。しかし、膨大な情報を国民が理解するのは大変だ。原発の専門家ではない技術者でもない我々だからこそわかりやすく報告ができるはず。多くの人が「関心を持ち続け、情報を得て理解しようと努力する」ことが大事だ。

2017年3月16日開催の第59回院内集会につきご報告します。この日の講師は【1F watcher】(#1)の名でウォッチ活動が続けておられる中島賢一郎さん(#2)にお願いしました。

福島原発行動隊(SVCF)の活動のなかで地味ながら大変重要なものであった【原発ウォッチャー】が、作業メンバーの健康問題などによって2014年3月に活動停止したあとを受けて、活動を続けておられる方です。

その活動の本旨は「東電、国等が発表したデータの通訳」であると、この日の講演のなかで語っておられます。ひとつには、とても常人には読み通すことが出来ない膨大な量の東電などの発表資料を総覧すること。もうひとつは、この言わば“官製”の資料の行間を読み、隠されているかもしれない真実に触れる手がかりを提供することです。

3/16日の集会はいつもの通り11-13時、参議院議員会館地下の会議室で、以下の内容で行われました。

○

●テーマ:< 1F watcher >の最新のレポート

「燃料デブリの取出し」(#3)と使用済み燃料プール対策(#4)を読む。

●講演概要

1. 経緯 「原発ウォッチャー」から「1F watcher」へ
2. 東電、国等が発表したデータの通訳
3. 東電や国のサイトでは見つからないデータもある
4. こんな風に作っています
- 5.【最新レポート2017.2 使用済み核燃料の取り出し】
- 6.【最新レポート2017.2 燃料デブリの取り出し】

○

それぞれの項目の講演要旨は、以下の通りです。

1. 経緯

1Fに関する膨大な資料を要約した「月例レポート」を発表し

3. 東電や国のサイトでは見つからないデータも

最新のロードマップを過去のものと比較すると、微妙な差がみられる。ロードマップ2版まではなにがなんでも燃料デブリまで取り出し1Fを更地にして福島にお返しするという、「ゴール」は不動で、その「ゴール」に向かってどのように廃炉作業を進めていくかが基調であった。

しかし技術戦略レポート2015ないしロードマップ3版からは、燃料デブリ・使用済み燃料そのものといった「モノ」自体のリスクに加え、廃炉作業という「過程=コト」が有するリスクの管理が前面に出てきている。廃炉作業の過程で放射性物質が放出され、帰還した住民が被ばくする、あるいは作業員の被ばくが許容範囲を超えるといった事態を回避することを優先するという判断である。

この変更を、住民の帰還や復興に反映させなければならないはずだが、公表資料においてはそうなっていない。

4. こんな風に作っている

報告は、行動隊ウォッチャーの時の構成を継続し、次のようになっている。

- 00 基本情報
- 01 原子炉の状態
- 02 滞留水・汚染水の状況
- 03 放射線量低減・汚染拡大防止
- 04 使用済み燃料プール
- 05 燃料デブリの取り出し
- 06 個体廃棄物の保管・管理・処分
- 07 原子炉施設の解体
- 08 要員計画・作業安全確保

○

中島講演の本題は、5.【使用済み核燃料の取り出し】と6.【燃料デブリの取り出し】ですが、本稿が長過ぎてしまうことに



なるのを避けるため、中島さんが用意された資料(#3、#4)に譲ります。

集会終わり近くの質疑で、「作業現場において最も重要な問題である作業員の被ばくについて、公式資料ではどのようになっているか。かなり被ばくが高く作業が続けられなくなっている作業員もいるのではないか」との質問がありました。中島さんは、「燃料デブリの取り出し」レポート末尾に掲載されている毎日新聞の記事(#5)を引用して以下のように答えられました。「現場は、作業員が建屋に入って数十秒で警報音がなるという状況で、やれる人がいなくなるのではないかと心配している」

中島講演は、公式発表資料を引用しながら淡々と進められましたが、「このことだけは私見を述べたい」として、次のように話されました。「燃料デブリの取出し2月レポートにもある通り、現在の福島県の浜通りの復興プランの全ては使用済み核燃料でもある核燃料デブリを完全撤去した廃炉を前提としている。しかし、東電/政府は、一部にせよ核燃料デブリを残した形での廃炉と完全撤去の場合の廃炉とで、ひと・地域環境・社会に与える影響にどのような異同があるかを明らかにしておく必要があると思います」

事故収束(廃炉)事業のゴールがどのようなものになるかは、避難指示解除の進展、住民の帰還計画・復興計画を大きく左右するからということです。

< 1 F watcher > について(1F watcher サイトのねらい) 東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所(以下「1F(イチエフ)」と省略)の事故から4年以上が過ぎました。現在、この原発事故についての人々の関心はきわめて低くなっており、1Fが現在どのような状況にあるのかについての関心も薄くなっていると言わざるをえません。毎日の新聞やテレビで伝えられる1Fに関するニュースは非常に少なく、断片的なものになっています。(中略)

しかし、私たちは1Fから本当に放射性物質が漏れていないのかどうか、あるいはこの事故が今後どのように収束していくのかは、1F周辺の人たちばかりでなく、日本国民全体に影響を及ぼす問題であり続けていると考えています。そこで、SVCFの原発ウォッチャーに参加していたメンバーの一部がその活動内容を継承することとして、2015年4月にSVCFからは切り離れた形で、「福島第一原発 Watcher (1F watcher)」として、このサイトをオープンしました。

東京電力のウェブサイトには、1Fの状況に関して膨大な量

の情報とデータが掲載されています。しかし、その量がきわめて膨大であること、またその正確な理解には専門的な知識が必要であることなどから、これらの情報・データが一般の人たちに十分に理解され、浸透しているとは言えないと考えています。そこで、私たちは東京電力が公表しているこれらの情報・データを中心に、また経済産業省や原子力規制庁などの政府機関・公的機関が公表している情報・データ、さらにはマスメディアが提供している情報なども参考にしながら、1Fが現在どのような状況にあるのかを私たちに把握し、それを可能な限り分かりやすい情報として公開したいと考えています。

しかし、現状でこの活動にたずさわっているメンバーは原子力の専門家ではありません。いや原子力どころか理科系・技術系の人間ですらありません。したがって、原発や原発事故に関する私たちの知識や理解力が決して高い水準のものではなく、むしろ不正確な理解をしているかもしれないことは十分に認識しています。さらに、私たちが把握している情報自体、1Fの現況に関する、ほんの一部にしか過ぎないことも承知しています。それにもかかわらず、ある意味で身の程知らずのこうした試みに取り組んでみようと考えたのは、むしろ専門家ではない私たち自身がこの問題について「関心を持ち続け、情報を得て理解しよう」と努力することこそが、原子力の「専門家」の人たちや東電、政府の動きをチェックすることにつながると考えたからです。「関心を持ち続ける」こと、それが長い目で見たときに1Fの収束を、より「国民の立場に沿った」ものにしていくと考えています。

このウェブサイトが、これからの日本を考えていく上で少しでも意味ある貢献ができることを私たちは願っていますし、もしこれをご覧になっている方々の中で、「自分もウォッチャーの一人として関心を持ち続けよう」という方がおられましたら、以下のフォームからご連絡をいただき、ぜひ仲間に加わっていただくよう、お願いいたします。

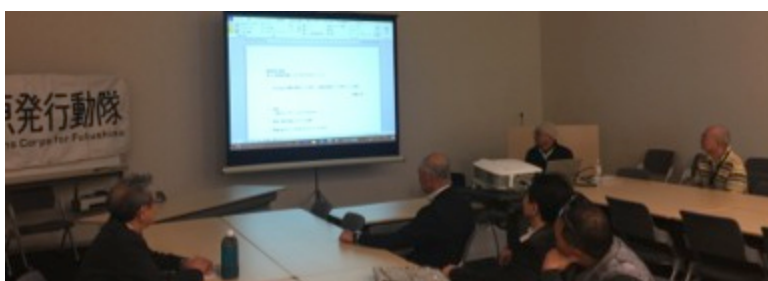
#2 中島さんは、1F watcherサイトで以下のように自己紹介しています。

「35年間、児童養護施設を中心に東京都の出先の福祉施設だけで働いてきました。2012年3月、東京都を退職。故郷の伊豆で溪流釣と温泉三昧の隠居生活に入りましたが、世の中への借りがあるという思いから福島原発行動隊の活動に少しずつ参加してきました。」

ウォッチ活動は、SVCFの活動地であるべき東京電力福島第一原子力発電所の現況、事故収束事業(廃炉作業)の進展を監視する気の長い、心が疲れる作業です。

#3 2017年2月 月例レポート 05 燃料デブリの取り出し

投稿日: 2017年3月6日 投稿者: 1F watcher



投稿日: [2017年3月6日](#) 投稿者: [1F watcher](#)

2017年2月のイチエフでの核燃料デブリの取り出し準備についてレポートします。

今月の新しいレポートは、2月16日に、投入された調査装置(サソリ型ロボット)が、堆積物が走行用のベルトに絡まって前進できなくなり、主要な調査目的である圧力容器直下の状況の観察はできないまま回収が断念された2号機格納容器内部(ペDESTAL内部)調査、および3月中に新たな自走式調査装置による格納容器地下階の調査が行われる予定の1号機格納容器内部(ペDESTAL外部)調査です。

2号機格納容器内部調査では格納容器内部の線量や温度、付着物の状態、プラットフォームの損傷状態など貴重な情報も得られたようです。38ページ～49ページで今調査についてレポートしました。1号機のレポートは29ページ～34ページです。先月までのレポートをお読みの方はこれらのページからお読みください。レポート本文:[201702-05-debris](#)

#4 2017年2月 月例レポート 使用済み燃料プール対策

投稿日: [2017年3月2日](#) 投稿者: [1F watcher](#)

2月の使用済み燃料プール対策についてレポートします。使用済み燃料プール対策については、2月に新たに着手された取り組み、継続されている作業で新たな段階に入った作業はありません。ヤード整備が各号機共通で継続されており、1号機ではオペレーションフロアの調査等が継続されています。2号機では原子炉建屋西側外壁の構台の設置が完了したようです。3号機では燃料取り出し用カバーの東西のストッパーが設置されました。8ページで使用済み燃料の保管状況の表を、9ページではその図を更新しました。また、16～17ページで全体のスケジュールを、18ページで作業エリア配置図を更新してありますが、内容的には先月のレポートに変わりはありません。

レポート本文:[9201702-04-nenryo](#)

#5 2月27日 毎日新聞 <福島2号機>作業1人5分、数十秒で警報音 内部調査過酷

東京電力福島第1原発2号機の格納容器の内部調査は、溶融燃料の全体像を把握できないまま終わった。昨年12月24日の早朝。暗闇の2号機原子炉建屋に、総合重機大手IHIや、関連企業などの作業員ら26人が集まった。タイベックスーツ(防護服)の上に、専用のカッパを着込み、手袋を4枚重ねて、手首にはビニールテープを巻いた。1～3号機では計1496体の核燃料が溶融。廃炉のためには位置や量を把握する必要がある。26人は、遠隔操作の機械を使ってロボットの入り口となる穴(直径11.5センチ)を格納容器に開けるのが任務だ。北海道の関連会社社員、石田亮介さん(28)は貫通を終えた機械を現場から撤去する作業などを担当した。最大の敵は放射線だ。石田さんはさらに重さ10キロの鉛ジャケットを着込んだ。作業時間は1人5分。被ばく量を1日当たり3ミリシーベルト以下にするため、身につけた線量計は1.5～2ミリシーベルトでアラームが鳴るように設定されており、その5分の1ごとにも音が鳴る。「ピッ」。建屋に入ると数十秒で最初の音が鳴った。「もう鳴るの?」。思わず心の中でつぶやいた。放射線の強さは場所によって大きく変わる。事前訓練で強い地点を頭にたたき込んだが「作業に集中して、無意識のうちに強い場所に立っていた」。焦る気持ちを抑えつつ、自然と作業の手の動きが早まる。その時、ボルトを回す機械の部品が外れ落ちて、床を転がった。「やばい。時間がない」と思った瞬間、冷や汗で全面マスクのガラスが白く曇り、視界を遮った。部品を拾い作業を終えたが全身が汗でじっとり湿っていた。「現場は放射線との闘いだった」と石田さんは振り返る一方、「みんながやりたがらない仕事だからこそ、やりがいと誇りを持っている」と語る。現場では一日でも早く廃炉を終えようと手探りの作業が続く。

7度目の3.11を迎えて：小名浜慰霊祭「花供養」



あの忌まわしい2011年3月11日の東日本大震災から6年が過ぎ、本年も3月11日は東日本の各地で被災に合われた犠牲者を弔う慰霊祭が開催されました。

震災後のボランティアや放射線測定などの活動を通して私たち福島原発行動隊と縁の深い福島県いわき市の小名浜でも、地域の人々や関係者等が集まる中で慰霊祭「花供養」が厳かに行われ、福島原発行動隊から岡本達思理事も参加させて頂

きました。

1年ぶりに訪れた小名浜は、もちろんかつてあった松林はもとより綺麗な海岸を見ることはできませんでしたが、さらに巨大な堤防が築かれて、風景を一変させていました。

式典では、この地に関わる様々な方々の挨拶が行われましたが、そうした中で地元小学生の元気に逞しく夢を語った挨拶に救われた思いです。合掌。

■4月のSVCF連絡会議

ウィークデイは金曜開催を基本とします。

①7日(金)10時30分～ ②14日(金)10時30分～ ③21日

(金)10時30分～ ④27日(木)院内集会後の14:00～

4月の週末開催は最終土曜日とします。

⑤29日(土)10時30分～